

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月28日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320028

研究課題名（和文）芸術家と工房の内と外—学習・共同制作・競争の諸相—

研究課題名（英文）Internal and External Relations of Artist Workshops: Aspects of Learning, Collaboration, and Emulation

研究代表者

中村 俊春（NAKAMURA TOSHIHARU）

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60198223

研究成果の概要（和文）：近代以前の時代において、芸術教育および制作の中心は工房であった。親方芸術家が経営する工房は、若い徒弟たちを養成する機関であり、またそこには、親方の指示に従って作品の制作を補助する助手たちがいた。本研究では、ヨーロッパおよび日本のさまざまな芸術家たちの工房の制作システムの特徴を明らかにし、かつ、独立した後の芸術家とかつて芸術家が属した工房との関係、異なる工房間の共同制作など、工房の外側との関係性を解明した。

研究成果の概要（英文）：In pre-modern times, workshops were basic institutions for art education and production. The workshops were operated by a master artist surrounded by apprentices and assistants who followed his instructions and helped him make artworks. This research examines the characteristics of various workshops in Europe and Japan. It also sheds light on workshops' external relations, such as their relationships with independent artists once belonging to them, collaboration between different workshops, and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2012年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：西洋美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史・芸術諸学・工房・徒弟制度・美術教育・共同制作・アカデミー・ルーベンス

1. 研究開始当初の背景

工房は、近代以前の芸術家の制作活動にとって、重要な組織であった。工房の頂点には、親方がいて、工房全体の活動を掌握し、作品

制作は、通常、彼の指揮下、工房の助手や弟子たちが参加する共同作業として行われた。また、工房は、一種の芸術家養成機関としても機能していて、工房の徒弟たちは、作品制

作のための材料の準備のような下働きから出発して、次第に、親方や年長の助手の制作を手伝うようになり、実践を通じて作品制作の方法を身につけていった。芸術家工房の問題については、西洋美術史でも、日本美術史でも、膨大な研究の蓄積がある。もっとも、従来の研究では、社会的組織・集団としての芸術家工房の特徴の解明や、あるいは、工房内での親方と助手たちによる制作方法の実態に対する考察、およびそれに基づく、工房作品の制作者の手分けの問題など、主として工房の内部に関する問題に注意が向けられてきた。しかし、芸術家の制作活動における工房の位置を明らかにするためには、工房内部での活動に注目するのみでは不十分で、新たにその外側との関係性を視野に入れた研究が必要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、西洋美術史および日本美術史の研究者たちが共同で、さまざまな時代および地域の芸術家工房に関する研究を進める。それによって、芸術家工房のあり方の時代・地域による相違を探るとともに、そのような差異を越えて芸術家工房に共通する諸特徴の解明を試みる。さらに、工房を去った芸術家とかつてその芸術家が属した工房との関係、工房外の芸術家との協力関係、専門分野を異にする工房の画家たちの共同制作、工房を越えての様式の普及・伝搬のメカニズムなど、芸術家と工房との関係を考える上できわめて重要な、工房内部での活動という枠組みを越えた外側との関係性の中から生じてくる諸問題を考察する。それによって、近世以前の芸術家の制作活動にとって工房が果たした役割を、その否定的側面を含めて幅広い視点から解明する。

3. 研究の方法

研究代表者の中村、研究分担者の根立、平川、それに連携研究者の剣持、深谷、吉田、阿部、安田、宮崎が、それぞれの研究分野に応じて、研究対象となる作品および資料の調査研究を進めながら、工房に関する研究を行った。その際に、研究目的である工房の内的関係および外側との関係性の問題の解明にとって特に重要と考えられる基本的な問題点（工房における徒弟の教育方法、工房内での制作方法、工房の親方と工房を去ったかつての弟子との競争関係、異なる工房の親方間の共同制作、工房への工房外の芸術家たちの出入り、工房を越えての様式の普及・伝搬など）を視野に入れて考察を進めた。そして、研究会で、各自が研究成果を発表して、意見交換を行った。

中村は、各人の個別研究の進捗状況を把握して、研究スケジュールや予算の使用に関する全体の調整役を務めた。さらに、中村は、研究の途上で得られた知見を論文に発表する形で、研究の方向性を示すとともに、全員の研究成果を取りまとめる論文集の作成に取り組んだ。さらに、中村は、ルーベンスと工房に関する研究成果を公表するための展覧会（「ルーベンスー栄光のアントワープ工房と原点のイタリア」、東急文化村ほか）の監修を担当し、数多くの作品を調査して、展覧会のための作品を選定し、カタログを執筆した。

4. 研究成果

本研究により、近世以前の西洋および日本における、芸術家工房の内的関係および外側との関係性をめぐって、さまざまな新知見を得ることができた。それらの研究成果を取りまとめた論文集『芸術家と工房の内と外ー学習・共同制作・競争の諸相』（2013年3月）は、今後、工房の問題を考察する上での基本文献の一つとして参照されることが期待されるであろう。また、中村が監修した展覧会「ルーベンスー栄光のアントワープ工房と原点のイタリア」によって、ルーベンス工房が如何なる組織であり、ルーベンスが工房外の画家たちともどのように共同制作を行ったのかを広く一般の美術愛好家に向けて紹介することができた。

なお、上述の論文集に発表された研究論文の内容は以下の通りである。

（1）平川は、ドイツのルネサンス期の画家アルブレヒト・デューラーの工房運営について、1495年から1511年間の現存作例および史料に基づいて詳細に検討した。その結果、助手たちに必要以上に親方の個人様式の模倣を求めない、あるいは、親方の個人様式との類似に乏しい工房作を許容するデューラー工房の特質が明らかとなった。こうした特質は、大量の工房作を必要とするほど絵画市場が未だ成熟していなかったドイツの実情や、当時の絵画技法が加筆修正に適さなかったことに加え、油彩画以上に収益の見込める版画という収入源をデューラーが確保していたといった経済的理由によるところが大きかったと推測される。その一方で、デューラーは、質の高い自作風の油彩画を強く望まれた際には、下絵提供を通じて独立した親方画家と共同制作を行っていたことも確認される。総じて、デューラー工房の場合、工房という枠組みが必ずしも様式の均質性、近似性を保証するものではなかった。

（2）剣持は、イタリアの画家スクアルチョ

一ネを取り上げ、その工房のコレクションに着目して研究を進めた。スクアルチャーネは、画家としては凡庸であったが、その工房に才能ある画家たちが次々に集まった。その理由として、同工房が所蔵していたコレクションの重要性が想定できる。つまり、彼は自らの画技よりも、収集した多様な美術資料によって手本を提供し、すぐれた指導者になり得たと考えられるのである。そこで、同工房に関わった画家の作品を分析し、どのような作品が手本とされたのかを検討した。この考察により明らかになったのは、スクアルチャーネが、フィリップ・リッピ、ドナテッロ、ポライウオーロなど、当時の最先端の芸術家たちの動向に注意を払い、自らのコレクションを更新し続けていたという事実である。以上の考察により、同工房における制作・教育活動の上で、コレクションが非常に重要な役割を果たしていたことが改めて確認された。

(3) 深谷は、17世紀前半ユトレヒトで活躍したブルーマルトに関する研究を行った。『線描帖』を始めとする、彼の素描に基づく版画シリーズを手がかりに、①ブルーマルト工房が手がけた大規模な祭壇画等の作品、②同じく少なくとも工房作と目される比較的小規模な作品、③彼の弟子が独立後に描いた作品、という3つの区分を設け、そのそれぞれにおいてブルーマルトの素描（及びそれに基づく版画）に見られる人物イメージが如何に活用されているかという点に着目して検討した。その結果、①についてはブルーマルト以外の画家の手が関与している作品が確実に指摘できそうであること、②の区分に関しては、ブルーマルトのストックイメージを用いて、ほぼすべてを弟子もしくは助手が描いたような作品のある可能性が高いことが明らかになった。また、③の数点の作品に見られるように、彼の工房内での学習・制作補助の痕跡が、独立後の弟子たちの制作に反映している可能性が高いことが明らかになった。

(4) 中村は、ルーベンス工房の重要な助手であったヴァン・ダイクについて考察した。当時、若い画家たちは、修業過程で、工房の助手として親方画家の制作を手伝うことが一般的であり、その際、親方画家の作風を模して描くことが求められた。ルーベンス工房に属したヴァン・ダイクは、実に巧みにルーベンスの画風で描くことができた。そのため、ルーベンスの優れた弟子として名を知られるようになった。だが、画家の個性的な作風が評価されるようになった時代にあって、親方画家の作風の巧みな模倣者であることでは、自身の名声を得ることは難しかっただろう。つまり、伝統的な工房システムによる画

家の養成方法は、画家の個性を重視するようになった新しい潮流と矛盾をきたすようになってきていたと考えられるのである。この時期のヴァン・ダイクの作品には、ルーベンスとは対照的な作風のものも多いが、それはヴァン・ダイクによる独自性呈示の試みと解釈できる。

(5) 吉田は、王立絵画彫刻アカデミーが、美術行政の柱であった18世紀フランスにおける、同業者組合および画家の工房に関する研究を行った。当時、同業組合の存在は決して過小評価することのできないものであり、結婚や修業などを通じて王立アカデミーと同業組合の間には日常的に交流が維持されていたことが、先行研究により確認された。つまり、アカデミー画家も職人文化の影響を免れてはいなかったのである。また、アカデミーの画家は自身の工房も有していたが、このようにアカデミー制度と個人工房という二重の制度のもとにあることが、アカデミー画家たちの工房運営に様々な局面で影響を及ぼしていたと考えられる。弟子の教育ならびに作品販売に関わる実務レベルでは、アカデミー画家であっても職人的な伝統を踏襲しており、一方で、アカデミーの学校でのデッサン教育や貴顕との社交などに関しては、アカデミー画家ならではの独自性が見られたことが、本研究を通じて明らかになった。

(6) 阿部は、フランス新古典主義の画家ダヴィッドとのジロデの師弟関係について、歴史的・社会的な相のもとに考察した。ジロデは、師に対してもっとも離反的な画家のひとりであり、自然の素朴な模倣を唱え公衆の批評に信を置くダヴィッドに対して、弟子は想像力の優位を主張し美術批評一般に不信感を抱いていた。だが、ジロデは、1810年頃まで旧師との関係を保持し、自作の批評を請うている。なぜなのか。タルドによれば、他者の考えや意見と反対の主張をすることもまた、実は模倣の一種である。そこでは互いの思考を理解し合っていることが前提とされるからである。一方モースによる贈与論によれば、師と弟子の相互評価は象徴的な価値の相互贈与に他ならない。対立しつつ継続した師弟関係は、これらふたつの力学によって説明できる。つまり社会的評価という象徴的な価値をめぐる、ふたりは互いの評価を必要としつつも、同時に独創的たらんとして「対立」していたのである。その意味でふたりの関係性は、この時代の芸術家同士の関係性一般の縮図とも解釈できる。

(7) 根立は、仏師の私工房が巨大化してくる撰関期から院政期の仏師工房について、諸資料から幾つか選び出して検討した。11から

12世紀の仏像制作については、大別して、仏師の私宅以外の特定の場所に便宜的に作業所を設定する場合と、仏師の私宅—工房において作業を行う場合があることが従来指摘されていたが、このことは撰関期以降の権門の造仏に携わる仏師すべてに当てはまる。記録から、康尚は、自宅を兼ねた地にかなり大規模な工房を構えていたことが確認でき、法成寺の造仏の状況から、百名ほどの仏師を抱えていたことが窺える。以降、工房の規模の拡大化はますます顕著となり、院政期になると、院を中心とした膨大な造仏需要に応えるために、円派仏師などは、親子や兄弟、さらには有力な弟子がそれぞれ半ば自立した工房、それも丈六像を制作できる巨大工房を構える状況に至った。そして、このような流派の中で半ば独立した工房が複数存在する現象は、慶派仏師にも引き継がれたと考えられる。

(8) 安田は、宗達派の作例である、京都・泉屋博古館所蔵の「伊勢物語図屏風」六曲一双（以下、泉屋博古館本）について詳細に考察した。宗達に始まり宗雪、相説へと継承されたと考えられる俵屋工房（宗達派）が制作した伊勢物語主題の作例は、扇面画や色紙絵がほとんどを占めている。これら宗達派の伊勢物語図扇面や色紙などの先行作例との関連から、泉屋博古館本にどの場面が描かれているのかを考察した。また、原本の制作が鎌倉時代に遡ると考えられる「異本伊勢物語絵（模本）」（東京国立博物館）を利用している場面が多いのに対し、江戸時代に制作された伊勢物語絵全般に大きな影響を及ぼした嵯峨本『伊勢物語』の挿絵を利用した場面はないことが確認された。そして制作年代を中心に宗達派における泉屋博古館本の位置を考察した結果、左隻は右隻に遅れて制作され、その右隻も寛永14-15年（1637-38）に着賛された宗達派「関屋図屏風」（烏丸光廣賛、東京国立博物館）より後に描かれたとの結論に達した。

(9) 宮崎は、江戸時代後期の絵師、酒井抱一の工房運営について、特に、抱一工房の主力であった鈴木蠣潭・其一、抱一工房の後継者酒井鶯蒲、本業は別にもつ富裕な町人であった守村抱儀の三つのグループの弟子たちに注目して考察した。鈴木蠣潭・其一については、抱一の出版活動の手伝い、下絵や本面の代作など、工房制作の重要な担い手になっていることを示した。そして、細かな指示がなくとも弟子たちによる代作が可能であった背景には、抱一作品の図様を伝える粉本の工房内における共有があると考え、抱一工房が得意とした画題の一つ「仁徳天皇図」に基づいて具体的に検討した。次に酒井鶯蒲につ

いては、抱一が鶯蒲を工房の後継者として積極的に後押しする様子を抱一・鶯蒲らが参加した寄合書などから読み取った。最後に守村抱儀については、江戸の富商の一人であり、俳人としても名が知られることから、工房制作を助ける弟子というよりも、むしろパトロンとしての役割も持っていることを確認した。

以上の研究が明らかにしたように、近代以前の西洋および日本において、工房は、弟子を養成し、作品を生み出すための芸術家の活動拠点として非常に重要な意味を有していた。そして、それは単に内に閉ざされた組織ではなく、外に向かって開かれた組織として、工房外の芸術家たちとも多くの接点を有していたのである。とりわけ、ルーベンスとヴァン・ダイク、あるいはダヴィッドとジロデの例が示すように、工房で学んだ画家がかつての師匠とどのような関係を結んだかは、重要かつ興味深い問題である。というのも、独立後の弟子はかつての師と注文を争うライバル関係になることもあったからである。その一方で、大規模な設営事業の場合には、親方の異なる複数の工房が共同で制作に当たった例も多く知られている。

また、工房には教育および制作のための資料として美術作品が収集されており、親方は弟子に手本を示し、工房の弟子たちはその手本を模倣することで親方のように制作する技術を身につけることが一般的であった。しかし、デューラー工房の例が示すように、必ずしも工房作品にそのような厳密な様式的均質性が求められていないような場合もある。つまり、工房による作風の統制の度合いは、時代と地域によって相違していたのである。

そして、近世以降、特に西洋では、芸術家の個性的な作風が重視されるにつれて、親方風に制作するという模倣を原則とした学習方法そのものが次第に疑問に付されることになる。新たに設立された美術学校は、工房の流儀を越えた、より普遍的な芸術教育のあり方を探っていくことになるし、そもそも近代以降の芸術観は、他人の手を借りた工房的な制作方法そのものに懐疑的になるのである。本研究は、そこに至る以前の時代における芸術家工房における活動のさまざまな側面を浮かび上がらせる試みであったが、逆にそこからまた、近代以降の芸術の特質を問い直すための資料を提供しているとも言えるであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 26 件)

- ① 中村俊春「旧ジョセフ・ロビンソン所蔵のヴァン・ダイク作《改悛のマグダラのマリア》」、『京都美学美術史学』11、査読有、2012年、191-216頁
- ② 中村俊春「ルーベンス工房のヴァン・ダイク」、『京都美学美術史学』10、査読有、2011年、39-83頁
- ③ NEDACHI, KENSUKE, “The Present State of Research on the History of Buddhist Sculpture during the Northern and Southern Dynasties”, *ACTA ASIATICA*, 100, 査読有, 2011年, pp. 1-20.
- ④ 平川佳世「幻の名画を求めて-16, 17世紀におけるデューラー素描の絵画化」、明治学院大学言語文化研究所『言語文化』28、査読有、2011年、45-71頁
- ⑤ 深谷訓子「17世紀オランダにおける素描教育-工房の外へ:『線描帖(Tekenboek)』と裸体素描」、『尾道大学芸術文化学部紀要』10、査読有、2011年、41-55頁

〔学会発表〕(計 20 件)

- ① NAKAMURA, TOSHIHARU, “The Penitent Magdalene from the Former Joseph Robinson Collection: Young van Dyck Working up Rubens’ Conception”, *Jacob Jordaens: Origin, Transformation, Conservation*, International Symposium, Kunsthalle Fridericianum, Kassel, Germany, 2013年5月7日
- ② 中村俊春「巨匠ルーベンスの仕事ぶり」、『ルーベンス-栄光のアントワープ工房と原点のイタリア』展記念講演会、北九州市立美術館、2013年4月28日
- ③ 中村俊春「ルーベンス-マントヴァの宮廷画家からヨーロッパの画家へ」、『ルーベンス-栄光のアントワープ工房と原点のイタリア』展記念講演会、東京イタリア文化会館、2013年3月9日
- ④ NEDACHI, KENSUKE, “The Intermediary Son-Style Iconography of the Todai-ji Great South Gate Kongo Rikishi Sculptures”, *2013 CIHA Colloquium in NERUTO, Japan*, 徳島県鳴門市大塚国際美術館、2013年1月16日
- ⑤ 根立研介「室町時代七条仏所の正系仏所の交代をめぐる」、美術史学会西支部例会、京都工芸繊維大学、2012年3月17日
- ⑥ NAKAMURA, TOSHIHARU, “Young Van Dyck as an Imitator of Rubens and His Struggle for Novelty”, *Beijing Forum 2011: The Harmony of Civilizations and Prosperity for All- Tradition and Mo-*

ernity, Transition and Transformation, 北京大学、2011年11月6日

- ⑦ 深谷訓子「ディルク・ファン・バビュレン作《キリストの埋葬》の図像源泉と注文主」、第64回美術史学会全国大会、同志社大学、2011年5月22日
- ⑧ 平川佳世「幻の名画を求めて-16、17世紀におけるデューラー素描の絵画化」、明治学院大学文学部芸術学科・国立西洋美術館共催シンポジウム『デューラー受容史500年』、明治学院大学、2010年11月13日

〔図書〕(計 17 件)

- ① 中村俊春(編著)『芸術家と工房の内と外-学習・共同制作・競争の諸相』(平成21年度~平成24年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)、田中プリント、2013年、268頁(平川佳世「デューラー工房試論-1510年代初頭までを中心に」1-30頁、剣持あずさ「スクアルチャーネ工房のコレクションをめぐる」31-58頁、深谷訓子「ブルーマルトの素描に基づいて-工房の内と外におけるその活用」58-94頁、中村俊春「ヴァン・ダイクのジレンマー工房助手としての仕事と独自性提示の試み」95-117頁、吉田朋子「アカデミー画家の個人工房-18世紀フランスに関する検討」117-138頁、阿部成樹「ダヴィッドとジロデー師弟関係のひとつのケースとして」139-166頁、根立研介「院政期の仏師工房をめぐる小考」167-184頁、安田篤生「宗達派「伊勢物語図屏風」(泉屋博古館)試論」185-222頁、宮崎もも「酒井抱一の工房について-弟子との関係に注目して」223-264頁)
- ② 中村俊春(編著)『ルーベンス-栄光のアントワープ工房と原点のイタリア』(展覧会図録)、毎日新聞社、2013年、272頁
- ③ NAKAMURA, TOSHIHARU et al., *Essays for the Exhibition Catalogue Rubens: Inspired by Italy and Established in Antwerp*, The Mainichi Newspapers, 2013, 52 pp.

〔その他〕

- ① 中村俊春監修『ルーベンス-栄光のアントワープ工房と原点のイタリア』展、文化村ザ・ミュージアム、東京、北九州市立美術館、新潟県立近代美術館、2013年3月9日~4月21日、4月28日~6月16日、6月29日~8月11日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 俊春 (NAKAMURA TOSHIHARU)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60198223

(2) 研究分担者

根立 研介 (NEDACHI KENSUKE)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10303794
平川 佳世 (HIRAKAWA KAYO)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10340762

(3) 連携研究者

安田 篤生 (YASUDA ATSUO)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80230217
阿部 成樹 (ABE SHIGEKI)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：90270800
吉田 朋子 (YOSHIDA TOMOKO)
京都ノートルダム女子大学・人間文化学
部・講師
研究者番号：80609082
深谷 訓子 (FUKAYA MICHIKO)
京都市立芸術大学・美術学部・講師
研究者番号：30433379
剣持 あずさ (KENMOCHI AZUSA)
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号：40548939
宮崎 もも (MIYAZAKI MOMO)
大和文華館・学芸部・研究員
研究者番号：10416266